

梁川星巖・紅蘭―おどろき夫婦の足跡

京都産業大学名誉教授 功

母校・岐阜県立大垣北高等学校の校庭には、当地出身の漢詩人・梁川星巖が遺鏡を退けた和氣清麻呂を賛えた七言律詩の石碑が建つ。そのため、星巖は高校入学当初から気になる存在であり、在学中に出版された『星巖全集』(全五巻/四千首近くを収載)を図書館で見かけたが、当時は漢詩が難しく感じられ、あまり馴染めなかった。

時は流れ、私が東京から京都へ転勤した四十歳の頃、親友に勧められ詩吟を習い始めた。その時、最初に覚えたのは奇しくも星巖作の「芳野懐古」である。その後、鴨川縁の川端九太町東で星巖晩年の邸址を発見し、京都東山の霊山に建つ星巖の顕彰碑にも触れて、いつしか星巖の生き様への関心も強まっていた。

そんな折、大原富枝さんの名作『深川星巖・紅蘭―放浪の覚悟』(昭和四十八年、淡交社)を手に入れて味読した。そこには星巖が豪快な自由人であり、十五歳年下の従妹・紅蘭を妻として三十数年間も一緒に全国を彷徨った天下

の放浪者として知られる。その時、知人の紹介で面会した沖繩行政主

沖繩の戦没者と軍用基地への思い

京都産業大学名誉教授 功

今年、沖繩の日本国編入から一五〇年の節目の年にあたる。現在の沖繩県域を治めていた「琉球王国」は、江戸時代を通じて薩摩藩と中国の清朝とに面属するような立場をとってきたが、明治五年(一八七二)、「琉球藩」と位置づけられ正式に日本国に編入。その七年後(同十二年)、藩を廃して「沖繩県」とされたのである。

その沖繩は第二次世界大戦末期の昭和二十年(一九四五)に本土決戦の防壁として米軍の総攻撃を受け、軍人・軍属が約十万人、一般住民も約十万人と、実に多くの人々が悲惨な戦没を余儀なくされた。しかも、本土の大部分は同二十七年(一九五二)四月二十八日、講和条約の発効により被占領下から独立したが、沖繩はアメリカによる軍政が続き、ようやく本土復帰が実現したのは、終戦から三十二年後の昭和四十七年(一九七二)五月十五日のことである。

私は昭和四十二年(一九六七)八月に沖繩本島各地を廻ったことがある。その時、知人の紹介で面会した沖繩行政主

に努めつつ、沖繩の皆さんに感謝の気持ちを寄せ続けた。

巻頭随想 いま、伝えたいこと 歴史研究 第702号 2022年7月号

沖繩の戦没者と軍用基地への思い

京都産業大学名誉教授 功

今年、沖繩の日本国編入から一五〇年の節目の年にあたる。現在の沖繩県域を治めていた「琉球王国」は、江戸時代を通じて薩摩藩と中国の清朝とに面属するような立場をとってきたが、明治五年(一八七二)、「琉球藩」と位置づけられ正式に日本国に編入。その七年後(同十二年)、藩を廃して「沖繩県」とされたのである。

その沖繩は第二次世界大戦末期の昭和二十年(一九四五)に本土決戦の防壁として米軍の総攻撃を受け、軍人・軍属が約十万人、一般住民も約十万人と、実に多くの人々が悲惨な戦没を余儀なくされた。しかも、本土の大部分は同二十七年(一九五二)四月二十八日、講和条約の発効により被占領下から独立したが、沖繩はアメリカによる軍政が続き、ようやく本土復帰が実現したのは、終戦から三十二年後の昭和四十七年(一九七二)五月十五日のことである。

私は昭和四十二年(一九六七)八月に沖繩本島各地を廻ったことがある。その時、知人の紹介で面会した沖繩行政主